
CONNECT ~コネクト~

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CONNECT → ネクト→

【Zコード】

Z0723E

【作者名】

雨月

【あらすじ】

両目を開けると普通の人間だが、片方の眼ずつをあけると……とある少年の物語。

プロローグ（前書き）

プロローグの作者より、この部分を読まなくても問題はありません。
ですが、彼の過去を知るにはいい話だと思います。

プロローグ

プロローグ

一人の少年、名前を天道時時雨といつ。

彼はちょっと変わった……いや、結構変わった少年である。彼が特別なのか、はたまた彼の目が特別なのか……どちらかはわからないが、とりあえず彼の見える世界は変わっていた。とても視力が弱いとか、二キロ以上離れているものをしっかりと見ることができるという視力の持ち主ではない。

両方とも視力は一以上あるといったところだろうか？しかし、時雨の目は左目を瞑ると右目では相手の心を覗くことができたり、人間じやないものが見えたりもする……簡単に言つなら精神世界を見ることができるということだらう。

そして、右目を瞑ると……すなわち、左目のほつは機械が人権のようなものを手に入れてまもないこの世界では重宝するアクセス機能を持っているのである。これもまたセキュリティを一発で解析するのである。右目だけで。

以上のような能力を駆使すれば、悪の帝王になるなんて非常に簡単だつたのだが……温厚な性格が功を制したのか、世界がのつとられるようなことはないだろう。だろうというのはこれから先、そういうことがあるかもしれないということなのだが……

とりあえず、この天道時時雨という少年はごくごく普通に幼少期を過ごし、幼稚園にいた先生に甘え、小学生になつたら上級生とかに甘えていたりもしたものである。砂場では山を作つては知り合いたちに崩され、かわらで石を積み上げては色々と邪魔が入つたものである。

今回は中学生になつたときの話をしたいと思つ…………それは、よく晴れていた秋の日である…………

「あ～つかれたな～」

部活にはいると面倒だな～というだけの理由でどの部活にも所属していない（時雨の通っている中学では部活に入っていないものは強制的に生徒会の雑用となる）天道時雨は雑用係として苦楽（苦しみ、楽しみ）の生活を過ごしていた。

上級生に逆らうことも出来るのだが、それをして次の日にはきっと下駄箱に黒いラブレターか何かが入っていることは間違いないだろ。時雨には男からそういう類のものをもらいたくないということなので素直に従っているのである。

これが苦しみの殆どを占めており、残りの一は……

「…………今日も穴見センパイ、美しかったな～」

そういうて彼のちょっと童顔の鼻の下が伸びる…………これが、残りの一といったところだろうか？彼が入学してきて五ヶ月近くのときがこの中学で流れたのだが、毎日放課後そのセンパイを見るだけが楽しみとなっていた。

きっかけがあつたのは新しく発足した生徒会の雑用をこなしてたときだろ？彼女は前の生徒会のときも図書委員長をしており、今では生徒会長補佐である。そして、はつきり言つて今の生徒会長よりも有能に違ひない。

穴見幸恵あなみゆきえ…………これが生徒会長補佐の名前であり、憧れの穴見センパイの名前である。

天道時雨の調べによれば、中学校近くのマンションに住んでおり、父母共に健在で彼女を含めて三人の兄弟がいるらしい。彼女が一番上ではなく、既に他の二人は高校や就職をしているそうである。天道時雨の調べというよりも、生徒会室を掃除していく時雨がたまたま彼女の近辺書類を見つけた…………といったほうがいいだろう。もっとも、この書類も今では厳重に保管されているので新しい情報とはいえないが。

「…………明日も、きつと美しいんだろうな…………」

時雨はそんなことを言いながら夕陽が沈む方向とは反対側の自宅

へとだらだらと歩いていた。結構な道のりなので自転車許可を取り付けようとしたのだが距離ぎりぎりで申請が却下されてしまつた。比較的仲良くなれた上級生の生徒会メンバーにそのことを言つたら来年から改正されるそうであつとしている。

「今日の晩御飯、何かな~」

ボーッとしながら考えるのは穴見センパイのことか、晩御飯のことだった。

中学生だったらもうちょっとと学業面のことを考えたまうがいいと思つたのだが、時雨の考えでは大体取れて高校受かれればいいな~と思っている程度という彼の担任教師が聞いたら間違いなく激怒するであろうべきとうな考へだ。

家に帰つたらゲームでもしようかな~と思つてゐる時雨の日々はこれからもつづくのだろう、と、彼自身考へてゐる。明日も高嶺の花だが見るのは無料であるという穴見センパイのりりしい横顔を見ることができるものと思つていた。

しかし、これからもつづくであつひの怠惰な生活は十秒後、崩れ去ることとなつた。

キキーアー!!

「ん?」

横を向くと、黒塗りでスマートガラスがつけられている車が止まる。

なんだろう?それが時雨の第一に思つた考えで、見えそうで見えない車の中身が気になつたのだが、なんだか怪しい感じがした。

誘拐か?急いで離れようとした時雨の頭にそんなことが思い浮かぶ……しかし、男を誘拐してどうするのだろうか?という考えが思い浮かんだ。

身代金狙いなのかもしれないなと思つたのだが、それなら夕飯の買物をしているおばさんたちが町を歩いているこの時間帯に帰つて

いる自分より、もつと早い時間帯に帰っている小学生をさらつたほうが計画的ではないのか？と時雨は考える。まあ、時雨も見た目は小学生に見えないでもないのだが学ランを着ていることが唯一中学生といえることだらう。

それならば、あの車の扉が開いて露出度の高い服を着て手に鞭を持った大人のお姉さんが出てくるのではないか？そして、自分を鞭で叩いておーほっほっほ！とか叫ぶのかもしれない…………と考えて自分が馬鹿な考えをしていることに気がついて思考を止めた。

結論として単なる車であるというのが時雨の見解であつた。

だが、彼が考えていた考えは外れていた…………いや、少し前に考えていたこととは関係していたのだが…………

ガチャリ……

「ん？」

どうやらあの黒塗りの車から人が出てきたようだ。時雨は相手と田があわさなによつにちらりと相手を確認した。

「？」

相手は白衣を着ており、細身だった。どこかでみたような顔をしているのだが…………思い出せない。

その白衣の男性は時雨のほうに近づいており、薄ら笑いのようなくんだ笑いをしている。

時雨は思った…………この人はあれだ、どこか危ないとここの白衣を吸つて頭がぱつぱらぱ～になつてしまつた人なのだと…………今に奇妙奇天烈摩訶不思議な行動をするに違いないとも思ったのだが、現実は違つた。

身構えていた時雨の田の前に彼は立つと、白衣から一枚の名刺を取り出した。

「はじまして、天道時時雨君…………私はこいつうものだ」
渡された名刺を手に取り、名前を確認する…………

「……穴見、……陽？ 穴見？」

名前よりも苗字のほうに考えが回り、ああ、どこかで見た顔だと
思った時雨は生徒会室で落ちていた書類でみたことを思い出したの
である。

「君、生徒会のメンバーだよね？」

知り合い（まあ、穴見センパイのほうは時雨のことを知り合いで
認識しているかわからないという一方的な片道切符だが）の父な
で時雨は警戒（奇妙奇天烈・摩訶不思議な行動をしたときにどうして
た行動を自分がするべきか）をとくと頭を下げる。

「いつも、穴見センパイにはお世話になつてます」

主に、心の安定剤として……

「いやいや、君のような優れた部下がいると職務が進むと幸恵も言
つていたからお礼を言つるのは幸恵のほうだらう……私が娘に代わ
つて礼を述べたいと思う」

お互に頭を下げている状態で、どちらからともわけでもなく
顔を上げる。

「それで、僕に何か用でもあるんですか？」

穴見センパイに何かをしてもらつたとか、ちょっとかいを出したと
かそういう記憶がないので首をかしげる時雨に穴見センパイの父で
あると名乗つた男は告げる。

「单刀直入に言つと、君の目に付いて興味があるものなんだが……」

「

やっぱり、それか……時雨は思った。

彼の目に付いては結構情報が流れている。

これは小学校の頃の教頭先生がその情報を時雨を監禁してまで聞き
だし、悪い組織とか研究施設とかに高値で売りさばいたのである。
その後、教頭先生は逮捕されたのだが情報が流れるスピードを緩め
ることが出来ず、時雨のことについて知るひつ思えば小学生の体重か
ら身長、好きな女の子の好みに歩き出すときの左右の足というプラ
イベートな情報を誰でもお茶の間から知ることが出来るまでになつ

たのである。

ろくでもない教頭のおかげで時雨はまれに危なそうな組織にお菓子で誘われたり、綺麗なお姉さんにさらわれそうにもなった。まあ、そのつど警察が押さえてくれてはいたのだが…………そういうわけで、時雨は田に付いてどうするべきかわかつていた。時雨を狙っていた施設や団体、おまけに組織なんかは重要なセキュリティをかいぐるためにはつきり言つと時雨の左田を欲していたのである。だから、今回も時雨は言つた。

「…………残念ながら、僕の左田はもう使えませんよ？右田ならお化けを見ることがぐらいはできそうですねけどね…………」

右田は精神面…………まあ、こちちらについては知らないといこうのほうが多く、お化けとかそういう未だに存在があやふやな存在などを求めているのは宗教団体ぐらいだろうと時雨は思つていたのだ。見た目がどうみても研究員である六見センパイの父には無用の長物だと判断したのである。

人を見た目で判断してはいけない…………それを知つたのは五秒後だったのだ。

「おお！やつぱりそうか！」

「え？」

時雨はこのとき、自分が何か大きな渦に巻き込まれていつている途中だと気がついていなかつた。

肩をつかまれ、その手には痛いぐらいの力がこもつている…………

「その右田一相手の心を見ることができるんだう～なあ、そういうんだろう？？」

「…………い、痛い」

言われて、正解だと思つてこの人は危ないと同時に感じた。逃げようにも相手の力が強すぎてはなれることも出来ない。

「どうなんだ？はつきり言つてくれ！」

きっとこの人は嘘をついて自分を騙しているのだろうと時雨は思つた……そのままではやられると実感していた彼の耳に、相手の要

求が聞こえてくる。

「頼む！娘が…………幸恵が私のことをどう思つてているか覗いてきてくれないか？」

「…………は？」

痛みも忘れて相手の顔をまじまじと見る時雨。この親父は今、なんと言つただろうか？

「あの、今なんていいました？」

「娘が私のことをどう思つているか覗いてきてほしいといったんだ！」

時雨は年頃の娘を持つ中年男性が大体抱くであろうそういう気持ちをまだ知らなかつた。

「何故？」

「知りたいからだよ」

中年男性に対して汚いとか、不潔とかそういう気持ちを娘が抱いていないか…………いや、別に思つても構わないのだが、とりあえず自分のことを粗大ごみか何かと娘が勘違いしていいかどうかと父…………穴見陽は時雨に説明したのだった。わざわざ近くのフアミレスまで行つて時雨の前にはオレンジジュースが置かれている。その説明に対して学校での彼女の行動を思い返して時雨は告げる。「いや、大丈夫でしょう。穴見センパイはそんな人じやないと思いますけど？」

「それは君が家での娘を知らないから言えるのだよ…………私は恥ずかしながら妻に尻に敷かれていてね…………そんな私を娘がどう思つているのか、それも知りたいのだ」

右腕に傷があるのを見せる。

「これ、どうしたと思う？」

「え」と、研究か何かで事故を起こしたとかそういうのですか？痛々しいですね」

ガラス管が砕けてこの人に当たつているのを想像して青くなる時

雨……だが、現実はより厳しかつた。

「…………浮氣がばれて危うく妻にやられるところだつた」

「…………」

時雨はそれを聞いてどう答えたらいかわからなかつた。

「これでわかつただらう? 男女平等の世界はすばらしいと思うが、女尊男卑はいけないと思うのだ」

わかつてくれるだらう? という視線を送られてくるのだが、別に彼女とかそういうのがいな時雨にはさっぱりわからない。それならばと思って自分の父を想像するのだが、母親とラブラブで今日も何回田かわからぬ新婚旅行に旅立つてゐる。今度帰つてくるのはいつだつただろうか? と考えたところで現実へと戻された。

「浮氣……男だつたらすると思わないかね?」

「…………いや、よくわからないんですけど……話が逸れている気がするんですけど?」

「おつと、悪かったね…………」

すまないといつて話は元に戻る。

「…………母親にしかれている私を娘がどう感じるか…………勿論、私も娘に粗大ごみだとそういう目で見られないように整理整頓には気をつけてゐるのだ。お風呂から上がつたらパンツ一つで動き回るとか、休日は寝転がつて新聞を見るということは断じてしていいない!」

「どん!」とテーブルを叩き…………客がいっせいに時雨たちに視線を向ける。幸い、客が少なかつたので時雨はそこまで恥ずかしくはなかつた。

「わ、わかりました…………穴見センパイの心を覗いてくればいいんですね?」

「そうだ! わかつてくれたのか…………よかつたよかつた」

ありがとうと中年の男性が心から涙を流してゐる。その光景を見ると耐えなくなつた時雨は厄介なことを引き受けてしまつたと感じ

たのだった。

「…………どうしたものだらうか？」

穴見陽からの依頼を受けたのは昨日…………そして、その悩みを実践するために生徒会室へと早めにやつてきた。既に穴見センパイは生徒会室におり、まだ他の会員たちは来る気配がなかつた。

扉の外から麗しい穴見センパイを眺めるのはいいのだが……いかんせん、今から心を覗くのには罪悪感を感じる。それに、心を覗いている状態で誰かに話しかけられたりしてしまつたら厄介である。なぜなら、時雨の力を知らないものは殆どいないのでとりあえず何かをしているのがばれてしまい詰問されるだろう…………そろ会員たちが全員きそうなのである。

もつとも、この考えは時雨だけのものであつて実態としては会員たちは一時間後にようやく全員が揃つという遅刻振りであった。扉の窓から穴見センパイがこちらを見つけたようだ。手招きをしてくる。

「…………し、失礼しまーす」

そして時雨は思った…………今思えば、自分と穴見センパイが話すのはこれがはじめてではないか？と。

「天道時君、ちょっと話があるんだけど…………」

「は、はい！」

憧れのセンパイからそういうわれで一気に有頂天になつてしまつた時雨。彼の頭の中には勝手に幸せそうなストーリーが展開され、穴見陽との約束はどこかに行つてしまつた。

「昨日、父から何を言われたの？」

「…………」

しかし、穴見陽はすぐさま時雨の頭の中にリターンしてきた。どうやら、吹き飛ばされる前に命綱をしていたようだ。

昨日、一緒にいたところを見られたよつだと時雨は思つて嘘を思ついた。

「え、えーと、た、たまたま会いまして……」

「ふうん、たまたまね~……私さ、嘘つく人、大嫌いなの」

大嫌い、大嫌い、大嫌い…………このとき、時雨ははじめてあの穴見陽の気持ちがわかつた気がしたのだった。ああ、自分は嫌われてしまつた、名実共に…………と時雨は一撃必殺を食らつた者のように感じたのだった。

「…………」

無言の時雨に穴見センパイはにこりとして答える。

「…………でも、素直に答えてくれる人は大好きなんだけど…………」

「実はですね…………」

命綱で助かつていた穴見陽だつたが、大好きという言葉にはさみで綱を切られて時雨に裏切られたのだった…………天道時雨、彼はスパイとかそういう隠密行動に長けてはいなかもしれない。

「はあ…………」

すっかりしゃべつてしまつた時雨（このことは幸恵には内緒であるということまで）に対しても穴見センパイはこういった。

「…………私、約束を破つちゃう人も大嫌いなのよ…………天道時君、今日はもう帰つていいわ。私、大嫌いな人と一緒にいたくないから」「冷たい、冷たすぎる…………とは時雨は思つていなかつた。それよりもうつかり口を滑つてしまつた自分に対する情けないとおもう気持ちのほうが大きかつたからである。

「…………まあ、心を覗けただけでよかつたか」

心を覗いた結果、わかつたことがあつた。時雨は近くの公衆電話に入つて穴見陽の携帯電話の番号をプッシュする。

「…………あ、もしもし? 陽さんですか?」

『ああ、私だ…………で、どうだつた?』

『どうもこうも…………全部、話してしまいました…………すみませ

ん…………ですが、どうやら陽さんのこと嫌つてはいるというより……尊敬しているようです。穴見センパイの心はそう言つていまし

た

それを告げるとたいそう嬉しそうであった。

『そりかそりか！実にいい結果だつた…………ああ、そういうえば昨日君とあつたときから既に私たちは相手の罠にかかっていたようだ』

「罠？」

何か罠を仕掛けられていたのだろうかと時雨は考えるが、何も思いつかない。

『どうやら私の白衣に盗聴器が仕込まれていたようだつたのだ』

「…？」

『もう一つわかったことがあるが、娘は完全に妻の手先だ…………この盗聴器は幸恵のものだつたからね』

盗聴器を持つている中学生って何者だよ…………と、時雨は思いながら話を聞き続ける。

『まあ、今のところは幸恵に嫌われていなかつたことを喜ぶ』
しょう。何かお礼は必要かね？』

『いえ、いりません…………しこト言つなりもつこひつことを頼むのはやめて欲しいと…………』

『わかつた、これから先、私たちは無関係だ』

最後に心からのありがとうをもらつた時雨は公衆電話の受話器を元に戻したのだった。

「…………」

無関係になつたとはいゝ、あの憧れであつた穴見センパイからは嫌われてしまつた事実はもう変わらない。

「…………」

ほり苦い一方的な恋心が見事に（主に父親の所為で）崩れ去つたことを時雨は感じると昨日よりも高いところに位置している太陽を眺めることなく、下に向けて彼は家へと向かつて歩き出した。

『…………まあ、こんなものかもしれないな～』

穴見センパイには彼氏がいるつて噂だからなーと最後に呟いて走り出したのだった。

次の日、時雨が大食い部なるただ食べるだけの部活にはいったのはやけ食いのためか、穴見センパイがいる生徒会にいたくなつたのかの両方であろう……

プロローグ・とある屋敷にて

プロローグ・とある屋敷にて

古ぼけた洋風の屋敷のある部屋に一人の老人が座っている。いや、老人というより初老の男性と行つたほうが適格だろう。彼は何もない空間へと視線を向けると驚いたような仕草を見せる。

「おや、これはこれは…………ここに人が来るのは久しぶりですね。さて、先ほどの少年が歩むべき未来を間違えてしまった…………といふことなどありません。ですが、あの後の彼の行動によって道はいつてしまふのなら掃いて捨てるほどあるほどなのです。ああ、あの時こうしていればよかつた…………そういったことが人生という道の中ではたくさんあります。ですから、間違いなんてないので。勝手に間違いを自分、あるいは周りの人間が定義しているだけなのですから…………単純に言うならあの少年が今後どういった人生を歩もうともそれは間違いではなく、一つの結果です。例えそれが少年にとっていいことでなくとも…………話が逸れましたね。あの後の少年の行動、心象、周りの状況といったそれぞれの条件が組み合わさつて人生は築かれていくことでしょう。目をそむけず、彼が行き着く先…………どういったものになるのでしょうか？残念ながら私が知る由などありませんね…………おっと、もうお帰りですか？またいづれ、あなたと会間見ることができると私は信じておきましょう。会おうと思えば会える…………いい言葉です、誰が言ったかは知りませんがね」

初老の男性はもう用は終わつたばかりに近くにある椅子に腰掛けて足を組む。

「では、『じきげんよ』」

古ぼけた洋風の屋敷のある部屋に一人の男性が座つてゐる。部屋

の中に霧が現れ、彼は軽く微笑むと目を閉じた。

四月十一日 ナイトメア・スタート

小説部部長、天道時時雨は渡された小説を見て頭痛を抑えていた。

「…………いいかい、僕は出来れば面白おかしい小説を書いてきてくれって言わなかつたかな?」

悩みの種となつてゐる目の前の小説部員に田に向ける。

「…………え? これでいいんじやないんですか? 先輩の書つたとおりに書いたつもりなんですけど…………」

首をかわいらしくかしげているのだが、時雨にとつてはとぼけていとしか見えていなかつた。

「君、どういつた小説を書きたいって言つてたつけ?」

机から文化祭への小説分担表を取り出して確認する。

「えと、確か面白い小説を書いてくるでしたっけ?」

「そうそつ、それであつてるよ…………けど、これはどうみても僕の過去だよね?」

恨めしそうに田の前の女子部員を見てそんなことを言つた。

「ええ、まあ…………でも、面白かつたと思いますよ?」

「僕は面白くない」

「でも、ノンフィクション作家になるのが夢ですから…………」

「そんなことを言つてもなあ…………」

再び文句を言おうとした時雨たちの元に頃合を見計らつたかのように訪問者が訪れる。ぼろぼろの扉がぎざぎざ……といやな音を立てて開いた。

「…………時雨君、まだ帰らないの?」

そこに現れたのは幼馴染の霜崎亜美だつた。

「え、ああ…………霜崎さんか」

意外そうな顔をしながらも時雨は立ち上がる。立ち上がつたのだが、まだ未練があるのかあの小説を手放してはいなかつた。

「あのさ、今日何か用事があるつて言つてなかつたけ?」

「え、ま、まあ…………わつなんだけぢ…………どひじて霜崎さんが知つてるの?」

クラスでしゃべったのだが、彼女にしゃべっていたわけではない時雨は首を傾げるも彼女は当然だとばかりに言つてのけた。
「それはまあ、同じクラスにいれば聞こえてくるひともあると想つけど?」

ちなみに、霜崎亜美は隣のクラスである。

「ん…………やうなのかな? とりあえず僕は帰るよ。他のところに行つている部員たちは今日は自由解散だつて言つておこひ?」

「わかりました」

「うん、ありがとうね」

「いえいえ」

そんなやり取りをしている時雨たちにじひとつした田線を向ける霜崎亜美。だが、時雨は気づかず鞄を持って部屋を出たのだった。

時雨と霜崎亜美がであったのは五歳ぐらいだつたのだろう。毎朝、共に幼稚園へと向かい、隣の席でいつも一緒にいた。

しかし、世界がいつも同じ風景を見せる」とはないように彼らの関係も離れていくこととなつた。

小学校に入ると時雨は主に男子たちと遊ぶようになり、そんな時雨を霜崎亜美は影から見ていたりもしたのだが、別に彼女が暗い性格というわけではない。どちらかといふと時雨のほうが陰のあるところがあった。まあ、一般的な生徒だといつていいだろ。それに比べて霜崎亜美は明るく笑つてクラスの先頭に立つていた。高校一年になつて生徒会長に立候補するも負けてしまつたので今では副生徒会長となつてゐる。

夕焼けが沈みそつて沈まないといった中途半端な状態を珍しげに人して帰路へとついていた。

「ねえ、時雨君つてあの子と彼氏彼女の関係?」

「あの子?あの子つてどこの子?」

少し調子外れたような返答をした時雨にむつとしながらも彼女は笑みを絶やさずわかりやすいように説明した。

「あの小説を持ってきた子」

「ああ……なるほど。こや、彼女じゃないよ？それがどうかしたの？」

「…………いや、なんでもない」

言葉が続かず、一人して奇妙な空気のまま歩いていく……もつとも、時雨のほうはそうは思っていないのだが。

「あ、あのさあ…………」いつめつて一人で帰るのって久しぶりだよね？」

したから覗き込むように時雨の答えを待つ彼女は時雨の田には新鮮に映っていた。

「ん~確かにそうかもしねないね。最後に帰ったのは小学生最後の日だったかな？その後は自転車通学になつたからね」

記憶を思い返すように時雨は頭を振る。

「うん、やっぱり小学校通つてたときが最後だね。あとは霜崎さんは一緒に帰つてない」

「それなら、い、これからは一緒にか、」

帰ろうよ……霜崎亜美がそう言おつとしたときには時雨の携帯電話が鳴り出した。

「あ、ちょっとごめん…………」

携帯を取り出して耳にあて、時雨は相手と話をする。その表情を見た亜美は相手が時雨にとつてとても親しい相手だと一発でわかつた。相手のことをちゃんと付けで読んでいるし、なんだか嬉しそうだ。時雨がしゃべっている言葉だけを聞くと先ほどの女の子のようだ……時雨はどうかはわからないが、あの子はもしかしたら……

霜崎亜美はそんなことを思い、自分の心にいつものような暗い影が出来たような気がした。

時雨は電話を切つて霜崎亜美のほうへと頭を下げる。

「…………」「めん、僕忘れ物をしてきたようなんだ」

「忘れ物？」

「そう、ちょっとしたものなんだけ……」

もつ半分以上歩いてきており、ここから戻れば暗くなつて学校を出でることになるだらう。

「じゃ、私もついてく」

「え？ 別にいいよ。そこまでしてもらわなくとも。霜崎さんの手を煩わせるまでもないよ」

「いい、ついてく」

時雨もそれなら別に構わないけど、と言つて亜美と一緒に学校へと戻ることにした。亜美は時雨の手を掴んだ。時雨はそれをぎょっとしてみる。

「…………あ、あのひ…………手、握つてもいい？」

「え？」

「その、思い出に浸りたいって言つたか……」

「ああ、成る程……」

女の子って思い出に浸りたいときがあるって誰かから聞いたことがあつたなと時雨は楽観的な考えをしてそつまとめた。ちなみに、彼と霜崎亜美が手を繋いだことはこれまで一度もない。

霜崎亜美は心が満たされた状態だった。とりあえず、時雨が誰かと付き合っていたとしても今、彼の隣にいるのは自分であるとはつきりと意識していた。

「…………時雨君の手つて暖かいね」

「もうかな？ 僕、冷え性なんだげね」

まったくムードのない時雨に文句も言わず、霜崎亜美はその手を愛おしそうにそつと握る。

誰もいない路地に一人きり……しかも、もつ夕焼けは沈んでいて暗い……何度夢見たことだろうか？ 霜崎亜美はそう思いながらこの時間がずっと続いて欲しいと思っていた。小説部の女子部員が時雨と仲良くしていたときは心にどろりとした感情が芽生えたが、今はなりを潜めている……時雨の隣にいるのは自分であって彼女

ではない…………自分だ。

「あ、あの～…………霜崎さん？」

「え？ あ…………」

気がつけば霜崎亜美は時雨を横から抱きしめる形となっていた。どうやらボーッとしている間にこいつなつてしまつたようだ。

時雨のほうとしてはいきなり霜崎亜美が抱きついてきたので驚いていた。そう、驚く以外の感情はすべてどこかに吹き飛ばされていつていたのである。

「え、えっと、ど、どうしたの？」

一の腕辺りに当たる柔らかな感触にどきどきしながら時雨は霜崎亜美へとたずねる。頬は硬直していてうまく言葉がつむげない。あのまじめな霜崎亜美がこんなことをしてくるとはぜんぜん想像していなかつた。いや、彼女が自分と同じ道を通りこんだと自体不思議な出来事だつたといつていいだろ？

「あ、ちょ、ちょっと寒いから時雨君をだ、抱きしめたら暖かくなるかもつて……」

「で、でも僕、冷え性だから…………」

「あ、そ、そうだったよね…………」

霜崎亜美は確かにそういうのだが一向に離れる気配はなかつた。それどころか、体を時雨に引っ付けてくる。完璧に一の腕には霜崎亜美の胸が押し付けられている。

はじめてのことでも驚愕していた時雨の頭にだんだんと冷静さが戻つてきていた。しかし、腕に押し付けられている平均より大きい霜崎亜美の胸は彼の思考を半分以上ひきつけている。

よつて、時雨の否定的言葉ははつきりとすることなく口から吐き出された。

「ぼ、僕、冷え性だから…………」

「それなら私が暖めてあげる」

彼女にも冷静さが戻ってきたのか、言葉がはつきりしていた。しかし、時雨とは対照的に彼女には離れたいという意思が伝わってこ

なかつた。これでもかといふほど時雨に引っ付き始めた。

両足に霜崎亜美は自分の足を絡め、路地に時雨と一緒にそのまま倒れる。スカートから伸びている長い足はちよつとだけ血が出ていた。

「ちょ、ちょいと…………怪我してゐる」

「構わない…………から、その…………」

徐々に時雨の体の上に乗り、時雨の胸の上に綺麗な手をのせる。上気している顔を近づけ、霜崎亜美は田をつぶつた。

「…………」「…………」

時雨は完璧に彼女がこれから何をしようとしているのか悟った。いや、既に妄想でまさかなーと軽く考えていたことだったのだがどうやら本当だったようだ。

もう田の前まで迫っていた霜崎亜美の顔を凝視していた時雨だったが、彼の顔が一気に緊張した顔へと変わる。

「きやつ！！！」

時雨は亜美を突き飛ばし、彼女の上に乗った。そして、急いで立ち上がりて彼女の手を掴むと一きなり走り出す。

「ちょ、ちょいとどうしたの、時雨君！」

「…………はなれないで！僕の隣にきちんといて！いや、隣にいてくれなくていいからこの手を絶対に離さないでね！」

それだけ言うと時雨は黙つて走り出した。後方から物凄い音が聞こえ、それを聞くと時雨は住宅街の影に亜美を連れ込み押し倒して覆いかぶさつた。

どん！つと鈍い音が聞こえてきて地面が揺れる。時雨と亜美の田には自転車が転がつていくのが見えた。

「…………まさか、いつなるとはね…………」

「え？」

押し倒した亜美を立たせ、時雨は手を引いて路地のまづくと歩き出した。

先ほどまで一人がいた場所はクレーターを形成していた。時雨が

元いた場所には棒のよのなものが突き刺さっている。

「あれは？」

「逃げよう、ここにいちや、危ない」

冷たい、事実だけを告げる言葉。霜崎亜美は黙つて頷いて不安から時雨に体を預ける。しかし、時雨は亜美を押しやつた。

「…………霜崎さん、ここからまっすぐ走れるよね？」

「う、うん」

「じゃ、行つて」

時雨に背中を押されると、霜崎亜美は否定も出来ずに走り出した。ふと、空が視界に入る。霜崎亜美には空が歪んでいたように見えた。いや、見た目はまったく変わらない。直感的にそう思つただけなのかもしれない。だが、それは確實に歪んでいる。

五十メートルぐらい、走つただろうか？ 気がつけば霜崎亜美は住宅街にいた。いや、夕焼けはまだ沈んではいなかつた。

「時雨君？」

後ろを振り返つてみると、そこには誰もいない路地がただ、続いているだけだつた。

霜崎亜美を送り出した時雨はクレーターのほうを見ていた。

「…………まさか、こんなところで来るなんてね」

まったく予期していなかつたことを示すことに今の時雨が身を守るために使う武器は右手、左手だけだとことだ。もつとも、これ以上に予期していなかつたことは霜崎亜美のあの行動なのだが……

携帯がなり、時雨はそれに出る。相手はもつ確認している。

「…………うん、うん…………なるほど」

一方的に言われる情報だけを聞き取り、電話を切る。自分がすべき行動はもう決まつた。

まだ夕日が沈むのには早い時間帯だとここではまったく役に立たない時計を見ながら呟く。時計は午前七時を指している。

走り出し、目標へと向かう。まだ姿を現していないが、襲撃者は確実に自分を狙っているようだ。

「ちつ……」

右手で爆発、制服が少々破れるが関係なく走ることが出来る。問題はない。もう襲撃者を攻撃しても遅い。

「…………あれか

左目を金色に光らせ、時雨は空き地に不自然に置かれているオルゴールを見つける。それに向かつて思い切り拳を叩きつける。

「終わったかな」

時雨は屋上に自分がいることに気がつき、そつんぐ。夕日はやはり沈んでおらず、電波時計は午後五時三十一分を指していた。一陣の風が吹き、校庭の隅っこに植えられている桜の緑の葉っぱが静かに揺れる。

霜崎亜美のことが思い出され、彼女のほうに被害がなかつたかどうかたずねる必要があるだろ。」

時雨は屋上から急いで出ると、霜崎亜美と鉢合わせした。彼女はどうやら走ってきたようで今にも死にそうな顔をしていた。

「…………はあ…………はあ…………だ、大丈夫だったの？」

「え、ま、まあ…………それより、霜崎さんも大丈夫だった？」

「…………うん」

時雨は少し困った顔をした。目の前の少女の顔を見ることが出来ることを思い出す。柔らかい体を思い出し、押し倒された胸のことで頭がいっぱいになりそうになつて…………やるべき」とを思い出した。

「霜崎さん、悪いけど携帯電話の番号、教えてくれないかな？」

「え？」

「駄目ならいいんだけど、連絡を取りたいときに取れないと困るか

「うら

「も、勿論いよー」

「うら

携帯を取り出すと手際よく時雨にデータを送信する。まるで練習でもしたかのよう……
「ん、ありがとう……僕のも一応教えておくから何かあつたら電話して
「う、うん」
携帯電話の番号を交換すると、霜崎亜美はそのまま走り去ってしまった。
「まあ、あんなことがあつた後だからな
勝手に解釈し、頷く時雨だった。

二、

笑つて過ごせる日々を時雨はまだ過ごしていた。あれから少しの月日がたち…………といつても、十日ほどが過ぎたぐらいなのが。

あれから変わったことといえば、毎晩のように霜崎亜美から携帯へと電話がかかってきていた。話している時間は一時間近くだ。隣の家に住んでいるのだし、窓を開けて放そうと思えば話すことはできるのだが、彼女は気がつかないのかずっと時雨に携帯電話を使用しての会話を求めていたようだった。既に時雨の携帯の電池は換えなくては使い物にならないだろう。

電話について時雨はちょっと悩んでいた。いや、霜崎亜美のことではない。最近、ノイズが入ってきてているのだ。そのたびに霜崎亜美の身に何かあつたのだろうかと考えなくてはいけなくて、あわてて隣の家まで走つてくると安否を確認する毎日だった。

「…………あの空間に入っちゃったからなあ」

一昔前のことと思い出してそんなことをぼそりと呟く。

あの空間について知つていてる知り合いの話によれば一ヶ月ほど待つても何もなければその人物はあの空間にはもう入れないとのことだつたが、まだ十日ほどしかたっていない。注意をしておくことに異議はないとのことだつた。まあ、霜崎亜美の身辺警護をしておくのは時雨の仕事となるので時雨の気苦労が増えるだけだつたのだが。もつとも早い話が時雨と同じ場所、時間を霜崎亜美が共有してなければいいのだ。しかし、あの口を境に時雨の視界の端には絶対に霜崎亜美の姿があつた。これまでそうだつたのかもしれないが、彼女のことが気になつてしまつがない。

ふとした拍子に見ているのだ、ずっと。

別に時雨は霜崎亜美のことをどうとは思っていない。

問題は彼女の影にいる何かだ。

あそこから帰ってきて確實に彼女の影には何かが棲んでいる……いや、潜んでいるといつていいだろ？

これが何なのは大体見当がつくが、見当がつくからと言つて相手に背中を見せるのはまずい。襲われる可能性があるから。もしも襲われてしまつたら霜崎亜美には一回目に襲われたということになる。いや、あのときの住宅街のことはカウントには入れていない。あれも一種の襲われ方だがどうこうなつたわけではない。もつと小さい頃だ。そう、二人があつて間もないころに……

「…………寝るかな」

時計はいつも自分が寝ている時間帯を指している。今日はもう疲れた。英語の斎藤先生が執拗に当ってきたのが一番つらかった。英語は理解できないし、あの先生の言動も理解することは出来ないだろ？

明日は数学がある。予習を……

「…………してなかつたな」

忘れていたことに気がついたベッドに既に入つていた体を引きずるようにして机についてノートを広げ、教科書を読む。

「…………」

徐々に襲つてくる睡魔と心に浮かぶ霜崎亜美の顔。昔は亜美ちゃんと読んでいたが今では霜崎さんだ。彼女が遠くに感じられる。自分とは多分、違う道を進んでいるに違いない。いや、違う道を進んでいるのは自分のほうかもしれない。まあ、当然のことだろ？

あの影の中にいる相手を引きずり出さないと……

そういうつもろもの事情を考えながら、彼は終わらぬ数学の予習を前にして敗北を喫したのだった。

時雨は目が覚め、辺りを見渡す。勿論、数学の予習が終わっていないノートは真っ白で、なおかつよだれの穴が開いていた。異世界の門ができたようなひづな形をそれはしている。

「…………」

体を起こす。無理な姿勢で寝ていたからか、体の節々が痛い。もう年なのかもしない。現役高校生なのだがきっともう年だりつ。関節痛によく聞くといつて聞いた薬はどうにあつただろうか？

そんなどうでもいいことを考えている時雨の耳にチャイムの音が聞こえる。

「…………早いな」

時計を見るが、まだ七時前だ。なんだかだんだん来るのが早くなつてきているような……

「おじやましまーす」

霜崎亜美の明るい声が聞こえてくる。まあ、朝から聞く声の中でも最高の部類に入るだろつ。あれからずつと彼女は時雨の家に來ていた。何故かはよくわからないが、そっちのほうが時雨も安心する。

「おはよー、時雨君」

「…………おはよう

自室に勝手に入ってきたことについては特にない。
見られて困るようなものは既に処分をしている。

ベッドの下、教科書のカバーをしたフェイクブックにファイリングしたお気に入りのものまで……執拗なまでの霜崎亜美の探索には正直肝を冷やした。別にばれても構わないが学校で霜崎亜美がそんなことを言つてしまえば間違いなくあの学校からは転校しなくてはいけない。それだけは避けなくてはいけない事情を自分は持つている。

「まだ朝」はん食べてないの？」

「うん、いま目が覚めたところだから…………」

異世界の門を体に刻んでしまった数学のノートを閉じ、自室を出ることにした。

「適当にくつろいでて」

「うん、そうするつもり」

食事を見るために一階へと降りる。いろんな時間帯に彼女が来るの

は珍しいことだが、既に家族は仕事に行ってしまった。まあ、どうやら母親が先ほどまでいて霜崎亜美を上へと導いたのだろう。テーブルに座つて食事を始める。

味噌汁に焼き魚、ご飯といつたところだらうか？どれも既に温かみが消えかけているようだつた。

少し冷めてしまった朝食の食器を片付け、一階へと向かつ。自室の扉を開けると……

「…………す……」

霜崎亜美は時雨のベッドで寝ていた。とても安らかな顔をしている。十分ほどの時間の間に眠つてしまつたのだらう。制服で来て寝てしまつているから短めのスカートからは白い足が伸びていて、何かが見えそうである。

「…………」

朝から何を考えているのだ、自分はーと時雨は自分を叱咤して彼女を起こすために肩を叩こうとして……

「…………時雨君のえっち」

寝言と共に彼女は寝返りを少しだけうち、時雨が触れようとした肩の場所には……彼女の胸が来ていた。

「…………」

がつしと大きな胸を掴んでいたことに気がついて時雨はそれを放そうとするが、まるで離れない。左手で右手を掴んでようやく放す。

「…………」

顔が上気しているのが容易に想像できる。これはもう、やばい。色々と生の感情が浮かんできており、白い足の上のほうにはピンク色の何かが既に見えている。やばいという感情は待ってくれなかつたが……

霜崎亜美の影を確認することによって時雨の思考は鋭く、引き締まつた。

「霜崎さん、おきてよ。学校に遅れるからね」

「ん？あ～寝ちゃつてたのか」

今度は確實に肩を掴んで揺さぶることが出来た。これまであの空間関係には迷惑ばかりかけられたが今回ばかりは感謝をしている。あの影がいなかつたら今頃自分は警察に連絡されているところだつただろう。

笑えないそんなことを考えながら時雨は制服を手に取る。

「じゃ、ちょっと着替えるから…………」

出てつてもらいたいんだけど…………といおうとしたのだが、それを制するように霜崎亜美がすばやく口を開く。

「ああ、気にしなくていいよ。風景の一つだと思つていいから

「…………そ、そうなの？」

「そうだよ」

そういうならば…………時雨はパジャマを脱ぎ捨てる。なんだかとても霜崎亜美がこちらを見てきているようなのだが、最近の風景は眼力を持つようになったのだろうか？きっと、彼女は長年同じ場所に置かれて命を手に入れてしまつた日本人形みたいな置物となつているのだろうとなんだかわかりにくいことを考えていた。

じーっという擬音が聞こえてきそうな感じがしたが、それは気のせいだつた。

「あ

「え？」

突然に霜崎亜美が言葉を発する。

「その切り傷…………治つてなかつたんだ？」

「ん？どれ？」

あざやら何やらは体中いたるところはついている。しかし、切り傷は一つもないはずなのだが……

「どこ？」

「ここ」

右肩あたりに冷たくてすべすべした霜崎亜美の指が傷跡を撫でる。

「…………その傷つて…………ああ…………」

納得できた。そこにある傷は幼少の頃、それこそ、時雨と霜崎亞美がはじめてあつたとき……。霜崎亞美が時雨に負わせた怪我と言つていい。確かあの時は……

「「めんね

「え？」

考え方の途中で意識が現実へと引き戻され、霜崎亞美の両手が時雨の胸の前まで回されていて背中にはやわらかいものが当たっている。

「な、何が？」

後ろを取られたことでの影のことが確実に時雨の頭の中を支配していくが……。影は時雨の足元でニヤニヤしているだけだった。どうやら、野次馬的存在のような奴のようだ。どうぞ、先を続けるとばかりこじちらに視線を向けてくる。

「…………あの、霜崎さん…………気にしなくていいからや」

影のことが気になりながらもこのいろんな意味で危機的状況挟み撃ちを回避する方法を模索してみる。やはり、ここは離れるようこそ説得するのが一番だろう。

「それに、もうそろそろ学校だから…………」

やんわりとした口調で時雨は口を開いたのだが、

「私は学校より時雨君のほうが大事なの！――」

そう言って彼女は時雨を振り回すようにしてベッドへと倒す。あっという間に時雨はベッドに倒れこんでしまった。

「ちょ、ちょっと何を…………」

ベッドに押し倒されて時雨は困惑。さらに、霜崎亞美は制服を脱ぎ始めようとしている。それを時雨はぎょっとしたまま眺めていた結果、霜崎亞美のワイヤーシャツのボタンを途中まで開けて後は時雨の上へと乗り、時雨を見下ろす…………

瞳は潤み、頬は蒸気をしている。その瞳に見られることが心せりすぎ、抱きしめたいという感情が時雨の中で強くなつていいく……だが、疑りぶかい性格である時雨はからかわれているのかもしが

ないという感情が生まれたのであった。

「…………ちょっと、どいてくれない？」

「…………なんで？」

田の前の女の子が嘘をつくところじつとは知つてゐる。からかうこともないというのも知つてゐる。しかし、それは自分の視点からだけだ。もしかしたら影では嘘をつき、他人をあざ笑つているのかもしねりない。

「僕は…………僕はからかわれるのは嫌いだ」

少し、侮蔑のこもつた声があつといつ間に霜崎亞美の心を捉え、放さなくなつた。

「そんな…………私はからかつてるわけじゃ…………」

心のほぼ十割を占める存在にそんなことを言われ、彼女の心に不安と恐れ、表情はこわばつて涙が頬を伝つ。

「い、いや…………そんな、泣かないでも…………」

涙を見た瞬間に時雨の心は透き通つた。彼女は素直で一直線の得意を自分に向けているだけなのだ。

「ちょっと、どうしてくれないかな?」

有無を言わさず時雨は霜崎亞美的肩を掴んで起き上がり、ベッドに一人して腰掛け

、涙を流す彼女を抱きしめるような形で時雨は心をそのまま霜崎亞美に見せる……

「ごめんね、君の事を信じられなくなつたんだ」

視線を霜崎亞美的影に向ける…………そこに、あの野次馬みたいな顔をした影の姿はなかつた。今わかつた、あの影は中の良い二人を引き裂くためだけにここにいただけなのだと。影がいなくなつた今、一人きりだ。

「し、時雨君は…………」

泣いていた霜崎亞美は涙をこらえながら抱きしめてくれてゐる時雨にたずねる。

「…………私のこと、嫌い?」

「ん……幼馴染としては好きだよ」

「どうこの意味？」

「…………君のことなんて僕はさっぱりわからない…………だから
や、いろんなことをしてくるなんてわざわざり思つていなかつた」

静かに田をつぶる。小さい頃の霜崎亜美は自分を引っ張つて行つ
てくれているような頼もしい人物だつたが…………今抱きしめている
彼女は今にも折れそうな人物だ。その気になれば、彼女の心は一度
と立ち上がりなくなつてしまふ可能性だつてある。

その権利を霜崎亜美から勝手にもらつてしまつてしているのだ、自分
は。

「…………だ、だつて…………私からどんどん…………つづき、既に遠
いところにいる存在だから、近づきたかつた」

「やうかい？今、こいつしてすぐとなりに…………いや、引っ付いてい
るのにね。遠くじゃないこた、こんなに近くにいるよ。僕らは…………
」

抱きしめる力を強くする。細身の体が同じよつて力をこめてくる。
霜崎亜美は時雨の顔を見ることがなくたずねる。その言葉には重く、
切ない気持ちが混ざつていた。

「…………これから、どんなことがあつても隣に、近くにいていい
？」

「構わないよ」

「私だけを見てほしーの」

授業中はどうするべきだらうか？と時雨は思つたが、

「可能な限り見ておくよ

」

「い、いや、ちゃんと凝視しておぐよ。穴が開くまでね

「よかつた…………じゃあわ、キス…………しよう～」

霜崎亜美は離れようとするが、時雨がそれを許さなかつた。

「…………『めん、先にさ…………』

彼女は既に霜崎亜美を見ていなかつた。彼の視線の先にはそろそ

る学校がはじまつてしまつと指差している時計だつた。

「…………登校しない？僕、今のところ皆勤賞なんだよね」

こうして、二人はあわてて鞄を掴むとその部屋を出て行つてしまつたのだった。

もし、もしもだが…………霜崎亜美が時雨にからかわれているとわかつてその場から走り去つていたらどうなつていただろうか？もし、時雨から彼女を抱きしめ、学校なんか関係ないという方向に持つていつてしまつていたらこの話は変わつていたに違ひない。

物語は、まだあるのだ。これは、ただ、霜崎亜美と時雨の物語だつたというだけだ。

プロローグ…とある魔術の禁書list（前書き）

え～最近忙しそうでてんてこ舞いの作者、雨月です。この物語の方
向性をまったく決めぬまま突き進んできていますが…………どういつ
たことになるのか作者にもわかりません。それでも、付き合つてくれ
るのならついてきてください。

プロローグ2…とある屋敷の玄関にて

プロローグ2…とある屋敷の玄関にて

古ぼけていく館の玄関……そこにはいつかの老人の姿があつた。
「お久しぶりですね、元気そうで何よりです……人は皆、病氣に
陥つたりしたときに健康のありがたみがわかりますからね。理解で
きない?まあ、いいでしょう。さて、確かに彼はとても甘い人生を
この先歩んでいます。皆さんに見せられるのは彼の人生の一部だけ
です。ええ、人は所詮一瞬だけの姿しか捉えることはできませんか
らね。笑っていたつて陰では泣いている…………そんなこともある
ということです。さて、こういったことを言つのもなんですが、異
世界の扉というものは意外と近くにあるものなのかもしれません。
たとえば、いつも通つている自分の家の玄関をくぐった瞬間……
そこが別世界だという可能性がないわけでもありません。根拠なく
言つのはおかしいことですが、それも可能異性の一つということで
す。異世界の住人が我々を見れば異世界人です。無論、その逆も叱
りですけどね。異質なのはどちらなのか…………あちらなのか、こち
らなのか…………それを決めるのは自分自身です…………おっと、話が
過ぎてしましましたね。今回、彼は異世界へと赴くことになるでし
ょう。理由はどうあれ、言つてしまえば異世界人の仲間入りといつ
たところでしょうか?そこがどういった場所であろうと…………彼の
人生の一部だということを忘れてはいけません」

老人は面白そうに笑うと玄関を閉め、空氣を閉じ込めた。館は黄
緑色の煙に巻かれ、姿を消したのだった。

四月十一日 アナザーワールドスタート

一、

小説部の部室……そこは一つの特別教室（生物室）である。去年に見事部への昇格権を獲得し、総勢五名の少數精銳を図っている。いや、本当のところは今にも取り潰されそうで困っているのだが。

本日は部長が先生に呼ばれて用事を済ませている間に部活終了時間が過ぎてしまっていた。この部長、天道時時雨は急いで家に帰るためにこの生物室へと戻ってきたのである。

もし、ここで彼がもうちょっと早く戻つていれば彼の人生を変えていただろう。

部室内に入ると異質の空気を感じ取った。彼にも色々と事情があるような人間なのだがそれとはまた別の感じがする。

「あれ？」

誰かいるのかと思つて首をかしげて声を出してみるが、反応はない。ただ、そこにいるだけの存在としか思えなかつた。辺りを見る、誰もいない、困つたものだと呟く。

そう、時雨は誰かが隠れているのだろうと思つていた。そして、その考えは半分だけあつていた。相手は隠れているのではなく……

『後ろがお留守ですか』

「うをつけ！？」

時雨は前につんのめり、こけそうになるが何とか踏みとどまつて後ろを振り返る。そこにいるのは微笑をたたえた女性だつた。女性の衣服は上下共に白。淡い印象を受けながらもその存在は特異なものという矛盾した存在だつた。水の中で火が燃える……そんな感じだつた。

女性はあつとこう間に時雨に近づくと唇を時雨の唇に……ため

らにもなく、重ねた。

「！？」

田を思い切り開けて時雨は相手を見る。相手は田を閉じ、長いまつげとその柔らかな感触しか彼は覚えられなかつた。

彼女は離れ、時雨は放心状態に陥つていた。冷やされてゆく頭で考える。理解できない、何故、この女性は今、自分に唇を……重ねたのだろうかと。

『知りたい？ それなら、ついてきて』

「…………」

彼女は手をとるようなこともなく、生物室を後にする。時雨は、黙つて走り……

扉を出た、そこは野原だつた。

急展開についていけない時雨の脳みそは考えることを放棄。体は命令を待つてゐる待機状態となり、のどかな雰囲気だけが感じ取れる。

落ち着け、僕の頭。時雨はそいつて考えることを放棄した脳に訴えかける。考えるのだ、この状況を。

何が起つた？ 女性についていた。そうしたら、これだ。間髪いれず生物室の扉をぐぐつたらここにやつてきた。不思議な扉並みのすごさだ。まさか、あの生物室の扉は未来の道具か何かだったのだろうか？

現実逃避し始めた頭を叱咤。

「とりあえず…………歩こう」

周りには人がいない。右手には森、左手には小川が流れている。空には雲が、大地には鮮やかな緑がこの世界を彩つっていた。のどかな場所だ。

道を歩いていくと、一冊の手帳らしきものが転がつてゐる。拾い、裏と表を確認してみる。文字が書かれているが、見たこともな

い文字だ。だが、なんとかかれてはいるか理解できた。いや、勝手に理解したというべきか？それには『天道時時雨』と書かれている。

「？」

首をかしげる。

勿論、こんな日記帳を見たことはない。それでも、自分のならば読んでも構わないだろうということで日記帳を開ける。中は新品と言つていいほど綺麗だつたが、女性が書いたと思われるこれまた見知らぬ文字だ。誰もいなかつたので、時雨はそれを読む。勿論、その文字を頭は理解できていな。だが、読める。

「…………私に聞きたいことがあるのなら、ここからまっすぐ進んでそこの大好きな町の中央にあるお屋敷に住んでください。手段は問いません。執事になるもよし、鼠のようにこそこそと隠れるもよし……あなたの好きにして構いません。これはあなたの人生だから……ああ、言い忘れていましたがここはあなたがいた世界とはぜんぜん違います…………」

1ページを使用したその言葉を理解し、ああ、先ほどの女性に違いないと確信した。見知らぬ誰かが知らないだろう自分をからかうには少しおかしい。次のページにも何か書かれているが、一番最初に『その場所についてから読んでください』と書かれていたので読まなかつた。

こういう場合はどうであれ、従うべきだらう。ここがどんな世界なのかなさっぱり理解できない。自分がもう少し幼かつたら泣いて助けを求めていようが、今の自分は幼い自分ではない。幼児退行していたつてこの異質な出来事は解決しないのだ。

静かに走り出し、上に輝く自分が知っている太陽よりも少し大きい太陽が傾く前に日記帳に書かれている場所に着いたほうがいいだろひ。

走ること、三十分程度。汗を流しながら先を見ると町が見えてきた。いや、正確に言うと都と言つたほうがいいかもしない。それ

ほど、大きい町だつた。

都へとはいり、辺りを見渡す。

「…………」

なにやら、異様な雰囲気がする。殺氣…………そういったものどうか？鋭い視線は自分に向けられているわけではないようだが、確実に誰かが誰かを打ちのめそうとしているには違ひなかつた。

少し遠くの場所で金属の触れ合う音が聞こえてくる。そちらのほうに走つて向かつてみると、二人の男が戦つているのが見えた。鉄の棒で攻防を繰り返しているようだつた。

片方の一撃が右腕に直撃する。右腕は異様な音を立て、あらぬ方向に曲がつてしまつたのだが…………そこで、男はこちらを見る。

「…………これで最後だと思つていたんだが…………やはり、サバイバルを可能にする参加者がいたのか」

「え？」

男は徐々にこちらへと近づいてくる。なかなか聰明そうな顔をしているのだが、疲労しきつてているのか焦点はあつていない。

「ちょ、ちょっとまつた…………」

「問答無用！」

無手相手に鉄棒をふるう前に相手の腕を掴む。思つたとおり、相手はそれを跳ね除けるために腕を引き…………それが男の過ちとなつた。レンガで出来た道に穴が開く。本気だ、このままでは殺されてしまうかもしれない…………

相手が再びふるう前に相手の腕を掴む。思つたとおり、相手はそれを跳ね除けるために腕を引き…………それが男の過ちとなつた。

静かに時雨の一撃が相手の鳩尾に当たる。鍛えていただろうが、洗練された一撃の前に男は膝を着いて昏倒。

「一体、何なんだ？」

辺りを見渡して安全を確認する。そして、次に日記を開けて、次のページを読んでみる事にしたのだが、期待しているような言葉はなかつた。あるのはただ、『執事になるのなら主にだけは事務的に接し、常に冷静なポーカーフェイスを演じていくください』とある

のみだった。

日記帳を閉じたところ、ちよつど声が聞こえてきた。

「おお、そなたが今回の優勝者か！」

「え？」

声のしたほうを見ると、この町に住んでいるであろう人たちが時雨のことを見ていた。

「あの……」「

恰幅の良い男性が前に出てきてその手を握る。

「うんうん、疲れておるのだろう？さあ、早く我が屋敷へ…………」

囲まれ、連れて行かれる…………一種の誘拐か？そんな疑問が浮かぶまもなく時雨は連行されていったのだった。後に残ったのは倒れてうめき声を上げているこの何らかの大会の敗北者を片付ける町人たちだった。

「…………執事？ですか」

「おお、そうだとも」

恰幅の良い男性はテーブルを挟んで時雨に告げる。この部屋は豪華で、贅沢のきわみと言つていいくかもしれない。

「最近は何かと物騒だからな…………私の娘の護衛と身の回りの世話ををしてもらいたいのだ…………飛び入り参加していったことはわかっているが、あの男を倒した君の腕を私は買っているんだ。勿論、ここに住み込みで働いてもらう」

どうやら、どこからか見ていたらしい。時雨としてもこの屋敷に滞在するようにあの日記帳に書かれていた。ここは素直に従つていたほうがいくらか賢いかも知れない。

「…………わかりました」

そう告げると、相手はとても嬉しそうだった。

「おお！ そなか！ では、そなたにあうサイズの執事服を用意しよう！」

指をぱちりと鳴らすとメイド服を着た女性が一人やってきた。

「…?」

メイドの顔を見てぎょっとする。生物室であつた女性にそつくりだ……だが、どことなく幼い。あの妖艶な感じがぜんぜんしないのだ。おまけに相手も首をかしげてこちらを見ている。

「さあ、これ着てくれ。早くないと娘が帰つてくるからね」「どうやらどこかに行つているようで、時雨はその場で着替えさせられることになった。

「後は玄関のところで待つていてくれたまえ……ああ、そういう、執事をどうやって雇つたのかは絶対に口外しないでくれ。私と君だけが知つていいことだからね」「

では、私は忙しいから……そういう恰好の良い男性は部屋を出て行つてしまつた。残されたメイドが時雨を玄関前に連れて行き、そこで待つておくように行つて彼女もどこかに行つてしまつた。

こつ帰つてくるかわからないが、とりあえず、時雨はそこで待つことにした。

庭園を見ると、来るときにはぜんぜん気がつかなかつたがお金がかかつてゐる様子に見えた。門外漢だからさつぱりだが、これは結構金を使つてゐるに違ひない。マジモノのメイドなんてはじめてみたりしたからなあと時雨は脳裏によぎる先ほどのメイドさんのことを考えていた。

すばらしい庭園を見ていしてもさすがに飽きてきた時雨は手帳を取り出し、眺める。

ポーカーフェイス…………その意味を考えていた。事務的に、どんなことがあってもそれを貫くべきなのだとその文字にはこめられている気がした。次のページにも、文字が少しだけ書かれていた。

『一年後』

この屋敷に最低は一年以内といけないと時雨は理解した。門が開く音がし、時雨はそちらへと視線を送つた。女性に連れ添つて一人の女の子…………自分より一歳ぐらい年下に見える…………がやってきた。青色の髪の毛を後ろで結つて風に吹かれては青い髪が

さらさらと揺れる。

だが、顔が不機嫌そうだ、時雨を見つけてから。

「…………あんたが新しい僕？」

僕と書いてしもべと読める…………ちなみに、下部とかいてもしもべと読める。そんなどうでもいいことを考えて時雨は頭の中に『事務的な態度』と『ポーカーフェイス』という言葉が思い起こされる。

「さようです、お嬢様」

「…………ふんっ、部屋に案内してあげるからついてきなさい」

まったく面白くないといった調子でメイドと思われる女性と共に彼女の後ろにつぐ。

つれてこられた部屋には篭、モップ、雑巾にトイレのつまりを解除する魔法のステッキがあるような場所だった。

「ここが、今日からあんたの部屋よ」

「わかりました」

慄懾に勤め、心の中では『どう見たって掃除箱じゃねえか！しかも、僕の部屋よりでかい！』と大声で叫ぶ。部屋の大きさに文句はない。

その態度が癪に障つたのか、眉が釣りあがる。

「…………やっぱ、なし」

「そうですか」

再び時雨とメイドを従えて彼女は今度は庭へと向かつたのだった

…………日記に書かれていた通り、完璧にしたがうことにした。

つれてこられた先には見知らぬ文字で『サリー』と書かれた先ほどの掃除部屋より若干狭い部屋のような場所だった。

「今日からあんた、ここ」

「わかりました、お嬢様」

おおかた、犬小屋だろ？と思つて中をのぞくと…………そこには馬がいた。さすがに驚きそうになつたが、のつぺりとした表情で頭を下げる。

やはり、この態度が癪に障つてこりよりつが鋭くなる。

「……先客がいるからここもなし」

彼女は怒つているのが明白なのが理解できるほど危険なオーラを發していた。私、おこります。そんな感じだ。

後に時雨が連れて行かれた場所は様々だった。トイレ、屋根裏部屋、お嬢様の父の部屋、庭、地下室、地下牢屋、メイドの宿舎、犬小屋に屋根の上と……どこも時雨の家や部屋と比べたらでかくて、住みやすそうだった。

この屋敷の案内はもう必要ないといつぐらに彼女は時雨を連れまわしている。廊下を通るとたまにいるメイドさんが起こっている時雨の主を見るたびにあわてて頭を下げて田を合図せなによつこしている。

時雨と共にいるメイドはこれまたポーカーフェイスなのか、時雨と共に彼女の後ろを静かについているだけだった。

そして、唐突に彼女は立ち止まった。

「…………つまんないわ！」

叫び、後ろを振り返る。時雨はお嬢様の後ろにいたメイドよりも後ろでお嬢様にあかんべえをしていたのであわてて冷静な顔をして、たずねる。

「何がでじょうか？」

「あんたにいつてないわ！ちよつと、知恵を貸しなさい！で、あんたは後ろを向いてなさい」

後ろにいたメイドを引き寄せてなにやら極秘に話をし始める。時雨は後ろを向いて背筋正しくたつて話が終わるのを待つている。

「…………なるほどねえ…………もつこつちを向いてもいいわ」

何かを得たといった顔をしたお嬢様は時雨に告げた。

「私の部屋に住みなさいー！」

「これにはさすがに時雨は驚いたが、すぐさま答える。

「わかりました」

「…………〔冗談よ、冗談〕」

「これは失礼しました」

「そりだらうと思つていたので時雨は頭を下げて彼女に進言しただろつメイドを見やる。彼女の顔は冷たかつた。

「いらっしゃるわ、あんた」

「そういう、再び歩き出すと……」

「あら？…とても可愛い執事さんね？」

前のほうから豪華そうな服を纏つた女の子がやってきた。「ひらは時雨と同じ年ぐらいだろうか？

「…………あんた、私のうちに何しに来たのよ？」

眉を吊り上げ、食つて掛かるお嬢様。時雨は無表情で相手を見る。おお、胸が大きいな」とか、綺麗だな」とかそういう言葉は心の中にそっとしまつておいた。ついでに、彼女の顔もじっくりと覚える。「知りたければ教えてあげるけど？親戚ですか？」
むつとし、お嬢様は答える。

「いいわ、知らなくて……じつせ、面倒」とじょうからね」

ふいと視線をそらせて歩き出す。時雨とメイドは共に歩き出した。

「お待ちになつて、その執事さん…………これをもつていてくださいな」

手渡されてそれをポケットに入れると指示される。

「…………これは？」

「後ほど、見たほうがよろしくてよ…………では、」」さげんよつ

そういうて彼女は去つていった。お嬢様のほうは怒り狂つてゐるよつで後ろを見ようともしていない。

時雨はそれに静かについていくだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0723e/>

CONNECT ~コネクト~

2010年10月8日15時49分発行